

「だろう」の推量用法と韓国語形式の対照

成昊炫

キーワード：判断根拠、純粹推量、語用論的考慮、情報獲得の時間性、推量方式

1. はじめに

推量形式は一般的に話し手がある事柄の成立について不確実性を持ち、命題の真偽可否について断定できない場合に用いられるものである。日本語において、推量モダリティ形式は「だろう」「ようだ」「らしい」「しそうだ」「かもしれない」など数多く存在する。これらの形式の中で、代表的な推量形式は「だろう」である。その理由は推量意味において、その他の推量形式とは違って、ある事態についての描写的意味や語彙の意味特性が見られない純粹な推量形式である。また、テンスの分化を許せない点や連体節の中に生起しにくい点などのように、形態的や統語的にもその他の形式に比べて制限があり、推量モダリティ形式の中で、最も文法形式としての特性が目立つ形式である。このような背景で「だろう」の推量用法の規定については今まで様々な角度から数多くの考察がなされてきた。主に「だろう」の推量用法の究明とその他の推量形式との用法上に見られる弁別的特徴の究明について分析されてきたが、未だに納得できる見解が見られない。そこで、本稿では「だろう」の推量用法について再考察を行いたい。

本稿ではまず、今まで「だろう」推量用法について分析されてきた主な先行研究を概観し、そこに見られる不備点について考えてみる。その後、本稿では「だろう」の推量用法について既存研究で主張されてきたような区分基準によっては、「だろう」の推量用法の位置づけとその他の推量形式との弁別性は捉えられないという点を明らかにする。本稿では「だろう」の推量用法を明確に規定するためには従来研究のような発話状況や場面などを考慮しない短文中心の考察ではなく、文脈や状況などの語用論的考察を通して、問題の解決にアプローチしてみる。また、本稿では「だろう」と対応する韓国語推量形式の対応様相についても注目する。推量用法上において「だろう」と類似な振る舞いをする言語形式が韓国語にもいくつか見られるということで、今まで両言語の推量形式の用法上の類似点や相違点について分析してきた対照研究も多く見られる。(羅(1995)、金(1999)、尹(2003)など)、今までの対照研究に見られる共通的な問題は以下のような問題が見られる。

一つ目は、既存の対照研究では主に対訳文献の用例や頻度の調査によって、両言語の対応様相を捉えようとし、各形式が用いられた具体的な場面や状況を綿密に分析しなかった点である。二つ目は、「だろう」と対応する韓国語形式に同一基準、つまり、両言語を共に「根拠非前提 型・無準拠推量型」(金(1999)、尹(2003 など))に位置づけて、対応様相を捉え

ようと試みた。三つ目は、本稿では基本的に「だろう」に対応する韓国語形式を「^{kes}ㄹ-」「^uㄹ 것 이-」「^{kes}ㄹ지-」三つの形式であると捉えているが、既存の対照研究では各形式が用いられた文脈や場面を考慮せず、単文のみを対象とし、「だろう」との対応様相を常に一対二あるいは一対一のような一律的な対応提示に留まった。このような理由で、本稿は、既存の対照研究についても再検討を行うことにする。

2. 先行研究と問題の所在

2.1 推量形式「だろう」の先行研究

①判断根拠の主・客観性による捉え方 — 倉持(1980)、中島(1990)

- ・「だろう」：客観的根拠のない場合、主に主観的根拠に基づいた判断
- ・「ようだ/らしい」：客観的根拠に基づく推量判断

(1)ここなら煙草を吸ってもいいだろう。

(2)ここなら煙草を吸ってもいいようだ・らしい。(倉持 1980)

倉持(1980)によると、煙草を吸っても良いという客観的な根拠が想定できれば、「だろう」は使われにくいのにに対し、客観的な根拠が発見されず、ただ話し手の想像で判断する場合は「だろう」が自然に使われると述べている。

②根拠非前提型・無準拠推量型 — 宮崎(1993)、三宅(1995、2006)、金(1999)、尹(2003)
仁田(1991、2000)

今まで論議されてきた「だろう」の推量用法の規定に関する見解の中で、最も一般的に認められている主張で、例文(3)～(6)を挙げながら、「だろう」は判断根拠になる情報の存在が現実世界で有標的に出現する場合(例文(3)と(4))にはあまり用いられない主張した。

(3) *部屋の明かりがついている。彼女はまだ勉強しているだろう。(三宅 1995)

(4) *道路が濡れている。昨夜、雨が降っただろう。(現代日本語 2003)

(5) 彼のことから、何とうまくやるだろう/*ようだ/*らしい。(宮崎 1993)

(6) (ただ漠然とした希望を述べるかのように)

いずれは彼女も私の気持ちを分かってくれるだろう。/*ようだ/*らしい。(金 1999)

例えば、三宅(1995、2006)では、「だろう」の場合、上の例(3)～(4)のように、推量判断の根拠が話し手が現実世界で直接入手した情報に基づいた判断では用いられないと述べた。一方、例文(5)～(6)のように、話し手の想像世界に基づいた判断、つまり、現実世界で得た根拠に基づく判断ではない場合に自然に用いられると述べている。

③ 因果性概念による「だろう」の推量用法 — 澤田(2007)

澤田(2007)によると、ある原因を根拠とし、その結果を推量する以下の例(8)のような結果

推量には「だろう」は自然に許容するのに対し、ある結果を根拠とし、その原因を推量する以下の例(7)のような原因推量には「だろう」は不自然であると分析している。

(7)* デパートの中で子供が一人で泣いている。迷子になっただろう。(澤田 2007)

(8) 朝から雨が降り続けている。このままだと、大井川は増水するだろう。(澤田 2007)

以上のように、「だろう」推量の根拠は主に根拠の主観性と客観性、根拠非前提の有無、原因・結果推量などのような区分基準によって位置づけている。また、このような基準で「だろう」と他の推量形式が弁別されると捉えてきたが、このような主張は一般化できないと思われる。推量根拠と関連して、語用論的背景を考慮せずに、単文の文面上の意味だけを考慮しては「だろう」の推量用法は捉えられないと思われる。

2.2 問題の所在

この節では、多様な角度から分析されてきた上記した先行研究の問題点を考えてみる。まず、倉持(1980)や中島(1990)のように、「だろう」の用法を主観的根拠に基づいた推量として規定したのは問題がある。例えば、次の例文(9)~(10)で情報になる根拠は非常に客観的で確実性が高いと思われるのに、「だろう」は自然に許容できると思われる。

(9) (ある人が 12 階建てビルの屋上から飛び降りる場面を目撃しながら)

あの人は きっと死ぬだろう。

(10) 軒下につららが見えている。外は寒いだろう。(泉原 2007 : 949)

また、根拠非前提または無根拠を「だろう」の推量用法として捉えた見解も納得できない。例えば、以下の例(11)のように、話し手が現場で直接捕捉した目の根拠に基づいた判断でも「だろう」は問題なく許容できる。

(11) (真冬に外で薄いコートを着らずに、立っているある人を目にしながら)

あの人は きっと寒いだろう。

上記した先行研究で挙げた例文(5)~(6)に「だろう」が用いられたのは「根拠非前提型」という点のためではない。上の例文(5)の場合、推量判断の背後には話し手が相手について持っている既得情報や経験のような判断根拠に基づいて、「だろう」推量を用いられていると思われる。また、例文(6)は話し手の漠然な願望を述べるような想像世界に基づいた判断で表面的に見られる明確な根拠はないが、基本的に推量判断というのはそれが想像世界に基づいた判断であっても、話し手の想像というのも話者の心中には根拠になれるものがあると思われる。したがって、「だろう」を根拠非前提型として規定するのは無理があると

思われる。もう一つの観点、澤田(2007)の因果性概念の導入によって、「だろう」の推量用法を捉えようとした分析である。一般的にはある原因に基づいて、事態の結果を推量することが自然であるため、原因推量よりは結果推量をもっと説得力があるかもしれないが、この主張も一般化はできない。例えば、澤田(2007)に従うと、以下の例文(12)～(13)の場合は現実に行われている事態、つまり、ある結果を基にし、話し手がその原因を推量しているという原因推量として解釈可能であると思われるが、この場合、「だろう」は許容可能であると思われる。したがって、澤田の因果性概念によって「だろう」の推量用法を位置づけることも一般化できないので、再検討する必要がある。

(12)彼女はやせたから、最近、ダイエットでもしてるだろう。(泉原 2007 : 952)

(13)課長、呂律が回らないもの、当然酔ってるだろう。 (真実)

本稿は基本的に推量形式「だろう」は話し手によって、推量根拠が明確で確実性があると捉えられる場合は自然に用いられると考えている。本稿は「だろう」の推量用法を究明するためには、「だろう」が文面上に言語化された際に、どのような背景や根拠に基づいて使用されたのかという語用論的側面をより綿密に考慮すべきであると言及した。次節ではこの問題について少し考えてみたい。

2.3 推量形式「だろう」の意味機能と語用論的状況の考慮

文の中には両義性を持つものがいくらかでもある。このような両義性は語彙的両義性、統語的両義性、語用論的両義性に分けて考えることが可能である。この中で、語用論的両義性は同じ文や同じ表現であっても、それが実際用いられた文脈や状況によって意味が異なるということである。このような考慮は本稿の考察対象である「だろう」の推量用法を究明するにおいても、必ず考慮すべき点である。次の例文を見られたい。

(14a) *このパン、おいしいだろう。(泉原 2007)

(14b)(自分の直接食べた経験または他人からの情報など、パンに関する既得情報有り)
このパン、おいしいだろう。

「だろう」推量が不自然な例(14a)の場合は目前においてあるパンの外観や模様だけによる判断なので、「だろう」推量文の根拠としては不適切であると分析されてきたと考えられる。しかし、例(14b)のように、話し手が目前においてあるパンについて自分が直接食べた経験や他人から得た既得情報があれば、「だろう」推量文は成立する。したがって、上記した先行研究で挙げている例文のように、ただ、一つの文を挙げて、語用論的考慮なしに、「だろう」許容可否の文法性判断を行うということは関連形式の用法を究明するには、限界が見られるはずである。既に挙げた例(15a)をもう一度見ながら、考えてみたい。先行研究では

例文を提示しただけで、例文の不適切さについての言及が見られない。本稿は例文(15a)で「だろう」が非文になるのは話し手が彼女に関する既得情報をあまり持っていないため、「だろう」の使用が不自然である。それに対し、以下の例文(15b)は、話し手が「だろう」推量成立に必要な根拠を持っているため、「だろう」は問題なく許容できる。

(15a)*部屋の明かりがついている。彼女はまだ勉強しているだろう。(例文(3) 再掲)

(15b)話し手と彼女はとても親しい友人関係で、話し手は彼女の普段の生活習慣を知っていて、明かりがついている場合は、普段、勉強していたという既存知識有り
部屋の明かりがついている。　彼女はまだ勉強しているだろう。

2. 4 本稿の「だろう」の推量用法についての見解

本稿では「だろう」の推量用法について一般化できる見解を提案することはできないが、「だろう」推量用法についての現段階の暫定的な立場は以下のようである。

- ①基本的に「だろう」の推量用法は上記した先行研究で言及されてきた根拠前提可否、客観・主観性、因果性などのような基準によっては規定できない。また、このような基準ではその他の推量形式との弁別性は捉えられないと思っている。基本的に「だろう」の使用条件は事態に対する話者の推量根拠さえあれば、先行研究で述べたような特定根拠や条件の制約を受けず、純粹推量判断一般に広く用いられる。
- ②本稿は「だろう」推量を行う場合、その情報源になる根拠を現実世界で直接入手した根拠によって判断する場合と話し手の頭の中でめぐらした想像や仮想世界に基づいて判断を行う場合の二つに分けて捉える必要があると思われる。この二つの軸によって、「だろう」の推量文の成立可否に違いが見られると考えられる。

(16) (ある人が 12 階建てビルの屋上から飛び降りるのを目撃しながら)

あの人は きっと死ぬだろう。(例文(9) 再掲)

(17) 軒下につららが見えている。　外は寒いだろう。(例文(10) 再掲)

(18) *あの野菜、さっきから誰も買わないから、値段が高いだろう。(泉原 2007:953)

(19) *朝から忙しいそうにしているから、お客さんでも来るだろう。(泉原 2007:953)

例えば、上の例文(16)～(19)はすべて S1(根拠節)と S2(推量節)の構成になっているが、例文(16)と(17)の場合は S1(根拠節)と S2(推量節)間に論理的に必然性の度合いまたは根拠の明確性の度合いが(18)や(19)に比べて高いため、「だろう」推量が可能になると思われる。一方、例(18)～(19)は推量根拠が合理的ではない。しかし、根拠の客観性有無や必然性の度合いを明確に区分することは容易ではない。また、このような許容度の差が生じる理由の本稿で主張する見解で説明できるのかどうかの問題について今後更なる考察が必要であると思われる。

③「だろう」が頻繁に用いられるもう一つの場合は話し手の想像や仮想に基づいた判断の場合であるが、これは「だろう」を根拠非前提型として捉えた上記した先行研究で挙げた例文(5)や(6)からも確認できる。このような場合は話し手が現場で直接得た実在的な根拠による判断ではなく、話し手の頭の中でめぐらした想像に基づいた判断なので、根拠が現実世界に表面化されない。したがって、話し手の想像に基づく判断の場合は、上の例(16)～(19)のように、S1(根拠節)とS2(推量節)の関連性を捉えること自体が不可能である。このような場合では根拠の客観性有無や必然性の度合いとは関係なく、「だろう」は用いられると思われる。ただ、想像による判断であっても、話し手の一般的な知識や既得情報や過去経験のような内在的情報に基づいた上記した例文(5)の場合や例文(6)のように、何らかの具体的な根拠を持って判断するのではなく、ただ、話し手の漠然な願望を述べるような場合にも「だろう」推量は成立可能である。しかし、漠然な願望を述べる場合であっても、推量判断を行うということは根拠自体に確実性は落ちて、何らかの根拠によって判断を行っているため、「だろう」を根拠非前提型や無準拠推量型に位置づけるのは問題がある。

3. 韓国語¹推量形式の用法と 既存研究の 問題点

日本語と同様に、韓国語にも推量モダリティを担う形式は数多く存在する。「^{koss}ㄹ

ㄷ지」 「^{koss}ㄹ
것이」 「^{koss}ㄹ
는 모양이」 「^{na}ㄴ
ㄹ」 「^{chido}ㄹ
지도 모른다」 など、様々な形式が存在する。推量形式をその意味または機能的特性を考慮すると、日本語の「だろう」のような純粹推量形式²と「ようだ」「らしい」「しそうだ」のような非純粹推量形式があるように、韓国語にも「^{koss}ㄹ

ㄷ지」 「^{koss}ㄹ
것지」 「^uㄹ
것이」 のような純粹推量形式とその他の非純粹推量形式が存在する点で類似点が見られる。韓国の既存研究では「だろう」に対応すると思われる「^{koss}ㄹ

ㄷ지」 「^uㄹ
것이」 の推量用法と両者の弁別性究明に注目されてきたが、未だに共通認識は見られない。両者の違いについて行われてきた主な既存研究は金(1988)に詳しく紹介されている。金(1988)によると、韓国語文法では主に両者を根拠の客観性有無(申 1975)、根拠の主観・客観性(徐正洙(1978b))、判断根拠の現在情報・過去経験(成(1979))、発話時判断の可能有無(金(1980))などのような様々な区分基準で両者の違いを究明しようと試みたと述べているが、反証例文が多く見られるため、再検討の余地がある。「だろう」に対応する韓国語形式は「^{koss}ㄹ

ㄷ지」 「^{koss}ㄹ
것지」 「^uㄹ
것이」 の三つの形式が存在し、この三つの形式は「だろう」と同様に純粹推量形式という共通性を持っているが、文法的特性³において差異

¹ 本稿に挙げた韓国語例文のローマ字は文化観光部のローマ字表記法に従うものである。

² 「だろう」が用いられた場合は、ある場面や状況についての話し手の描写的意味はなく、ただ事態に対する純粹な話し手の推量判断のみを表していると思われる。一方、「ようだ」「しそうだ」「らしい」「にちがない」「かもしれない」などの推量形式群は推量という意味は持っているが、推量ではない単語または構成要素を持つ実質的意味、すなわち、文法的機能ではない意味が解釈される形式群を指す。

³ (1) 一つの形態素の語尾形式(完全な文法形態) : 「^{koss}ㄹ

ㄷ지」

(2) 複合形式(1) : 「^uㄹ
것이」 (連体形語尾+形式名詞+指定詞 の複合構成の形式)

(3) 複合形式(2) : 「ㄷ지」 (「ㄷ지」+「지」(終結語尾))

が見られる。本稿は「だろう」との対照を行うためには、これらの形式の弁別性を究明すべきだが、既存研究で適用させた基準では両者の違いが究明できない。

本稿ではこれを究明するためには「推量根拠になる情報獲得の時間性」と「推量根拠に基づいた推量方式の二つの語用論的要因を考慮する必要があると考えている。推量根拠になる情報の時間性とは概ね現在情報と過去情報を意味するもので、本稿で言う現在と過去は時制と関わる概念、すなわち、発話時を基準にする概念ではなく、日常の便意的、主観的概念である。現在という時間、または過去いう領域が多少主観的で流動的であることを前提にする。これは発話時以前の情報も時には現在の情報として見なされることも可能であることを意味する。そして、本稿でいう推量方式というのは直観性推量と推論性推量に二分される。まず、直観性推量は推量の根拠がある際に、その根拠から推論過程を経らず、直観的に推量する方式を意味する。そして、推論性推量は根拠に基づいて、論理的推論過程を経る推量方式である。例えば、以下の例(20)~(21)と(23)の韓国語の例文を観察すると、事態の成立を推量判断する場合、ある場合には情報獲得の時間性が適用されたり、ある場合には推量方式が適用されたりする。推量方式が適用される場合には情報獲得の時間が現在にもなれるし、過去にもなれる。話し手がどんな方法の推量をするのかは発話状況または話し手の主観的判断と関わる。以上の論述に基づいて、本稿では「だろう」に対応する韓国語推量形式の規定と対応する各形式の用法上の違いを次のように規定する。本稿は情報獲得の時点と推量方式をそれぞれの形式の弁別基準として捉える。

① 「-겠-」^{koss}：現在経験または近い過去経験や情報に基づく直観性推量に使用される。

(20) (하늘의 먹구름을 보면서) 곧 비가 오겠다/?을 거야。

(haneuleui meokgurumul bomyeonseo) got biga okessta/?oulkeoya.)

(空の黒い雨雲を見ながら) もうすぐ雨が降るだろう。

② 「-을 것 이-」^{koss i}：現在までの経験や情報に基づいた推論性推量判断に使用される。

(21) (AチームとBチームの野球試合を目の前で見ている人が、今、現在Bチームがリードしてるのを見ながら)

결국 A 팀이 이길 거야/이기겠다。(kyeolkukenun Atimi igilkeoya/igikessta)

結局、Aチームが勝つだろう。

③ 「-겠지-」^{koss c i}：上の両者に比べて確信度が低い推量であるため、場合によっては断定的判断を和らげる場合に使用される。情報獲得の時間性や推論方式と関係ない。

(22)地球がいつかはなくなるだろう。

(23a)지구가 언젠가는 없어지겠다。(jiguga eonjenganun eobssojikessta.)

(23b)지구가 언젠가는 없어질 거야。(jiguga eonjenganun eobssojiulkeoya.)

(23c)지구가 언젠가는 없어지겠지。(jiguga eonjenganun eobssojikescci.)

上の「だろう」の例(22)に対応する韓国語例文(23a,b)が何らかの明らかな推量根拠に基づ

いたものである反面、(23c)は両者よりは非常に弱い情報に基づいた判断に用いられる。そのため、「-겠지^{koss}」は時々断定を和らげたり、婉曲的に表現したりする場合に用いられる。実際に推量判断する場合、ある場合には情報の時間性が優先する場合もあり、ある場合には推量の方法が優先する場合もある。例えば、「-겠^{koss}」が過去情報に使われ、「-을 것^{u^l koss}이ⁱ」が現在情報と関連される事例もある。次の例文を見られたい。

(24) (話し手が夕方にテレビで明日の天気予報を聞きながら、発話する場面)

내일은 비가 오겠다/*을 거야。(明日は雨が降るだろう。)

(neilun biga okessta/oulkeoya.)

(25) (話し手が昨日テレビで聞いた天気予報に基づいて、現在、判断を行う場合)

내일은 비가 을 거야。(neilun biga oulkeoya.)

現在、天気予報を聞いている状況では、例(24)の直観性推量形式「-겠^{koss}」が自然で、「-을 것^{u^l koss}이ⁱ」は不自然である。しかし、例(25)のように、天気予報を聞き終わった後の時点での判断は過去情報に基づく判断になるため、この場合は「-을 것^{u^l koss}이ⁱ」「-겠^{koss}」両者すべて自然に用いられる。ところが、既に挙げた例(21)のように、同一場面で両者が共に用いられる場合も見られる。この場合には推量方法上の違いによって、両者の用法は弁別される。前者は直観性推量で、後者は推論性推量である。

4. 「だろう」と韓国語形式の既存の対照研究と問題点

4.1 既存の対照研究

「だろう」とこれに対応される韓国語推量形式の対照研究は今まで活発に論議されてきた。主な先行研究の結果だけを簡単に示すと以下の表のようである。

表 1

分類基準	言語	日本語	韓国語
純粹判断型 ⁴	羅(1995)	「だろう」	「겠다」「을 것이다」
根拠非前提型 ⁵	金(1999)	「だろう」	「겠지」「을 것이다」
無準拠推量型	尹(2003)	「だろう」	「을 것이다」

本稿では既存の対照研究には以下のようないくつかの問題があると思っている。

一つ目は、表 1 のように、両言語に同じ分類基準を適用させた点である。つまり、本稿で

⁴ 羅(1995)は「だろう」を純粹判断型に属する推量形式に位置づけ、判断の根拠を特に文面上に表面化する意識がなく、単に話し手の想像世界による推量判断に用いる形式として捉えている。

⁵ 金(1999)では、現実世界に判断の根拠になる実際の根拠があることを必ずしも前提としないということ根拠非前提型として位置づけている。その他に、用語上の違いはあるが、同じ立場として尹(2003)もある。

挙げた例文からも確認できるように、「だろう」と対応する韓国語形式はすべて話し手が現実世界で直接体験によって入手した根拠に基づいた判断に自然に用いられるため、表 1 のような分類基準では両言語の対応様相は規定できない。二つ目は、「だろう」に対応する韓国語形式は三つなのに、既存研究では一つあるいは二つの形式だけを対応させている。最も重要なのは既存の対照研究の主張とは違って、常に一律的な対応関係は見られないということである。三つ目は、対応する韓国語個別形式の弁別性究明に対する分析が足りない点である。例えば、羅(1995)では「だろう」に対応する形式を「-겠^{koss}다」「-을 것^u이^{koss}」と捉え、内的根拠の主・客観性によって、両者の違いを捉え、「だろう」との弁別性を図ろうとしたが、例(26)のように、「だろう」と同様に主・客観的根拠と関係なく用いられる。

(26)話し手が親しい友達のお見舞いに行ったとき、友達の病の状態が悪くなって、後1ヶ月ぐらいいしか生きられないと医者から聞いた後に、推量判断する場面)

花子はもうすぐ死ぬだろう。(하나코는 이제 곧 죽^{koss}겠다 / 죽^u을 것^{koss}이^u겠^{koss}지^u.)

(hanakonun ijae kott juk^{koss}essta/juk^uul^{koss}keoya/juk^{koss}essi.)

(27)全然既得情報のない初めて見る食べ物を目にしながら)*これ、おいしいだろう。

(28a)이 케익 맛있^{koss}겠다 (ikeik masiss^{koss}essta.)

(28b)이 케익 맛있^u을 거^{koss}야 (ikeik massiul^{koss}keoya.)

羅(1995)では、「だろう」に対応する二つの形式を根拠の主・客観性として規定して、また、金(1999)と尹(2003)では対応する韓国語形式をすべて根拠非前提型または無準拠推量型として規定しているが、どの見解も妥当性が見られない。また、「だろう」に対応する韓国語形式と関連して、羅(1995)では「-겠^{koss}다」「-을 것^u이^{koss}」、また、金(1999)では「-겠^{koss}지^u」「-을 것^u이^{koss}」、尹(2003)では「-을 것^u이^{koss}」一つのみを対応形式として規定しているが、なぜ、このような対応様相が見られる理由などについては説明がない。本稿では「だろう」に対応する韓国語形式を「-겠^{koss}」「-을 것^u이^{koss}」「-겠^{koss}지^u」と規定し、これらの形式は語用論的状况によって選別的に対応される形式であることを明確にする。また、形態上の特性からみると、「-겠^{koss}」が純粹推量の純粹文法形式としてのモダリティという点から「だろう」に最も類似する。ところが、「-을 것^u이^{koss}」も文法形式としての特性が認めると言う点から、また、「-겠^{koss}지^u」は「-겠^{koss}」と終結語尾の複合形態という点から特殊性はあるが、純粹推量の意味機能を持っている点から、三者すべて「だろう」に対応可能な形式として捉えられる。さらに、三つの形式すべて基本的に根拠前提型という点を明確にする。ここで注目すべき問題はこの三者がお互いにどのように弁別されるかを究明することである。

4.2 「だろう」と韓国語推量形式の対照

本節では「だろう」の推量用法とこれに対する韓国語の対応形式の規定とその対応様相について考えてみたい。次の例文を見られたい。

(29a) 軒下につららが見えているから、外は寒いだろう。(例文(10)再掲)

(29b) 처마 밑에 고드름이 보이니까, 밖은 춥겠다/추울 거야/춥겠지.

(chmamitte kodeumi boinika bakken chpkesssta/chulkeoya/chpkessci.)

上の例(29a)は「だろう」推量が現場での客観的な根拠に基づいた判断で、例(29b)の韓国語の三つの形式すべてに対応されている。既存研究ではこのような一対一あるいは一対二の画一的対応提示に留まった。しかし、これだけでは十分な対照になったとは言えない。すなわち、対応形式や対応方式において問題点が見られる。つまり、対応される韓国語形式が三つ存在するという点と各々の形式の用法上の差異を究明しなければならないことである。既に言及した通り、「^{koss}··」による推量は目前の現場または現場情報を根拠にし、話し手が直観的に推量する形式である。また、「^u·^{koss}·ⁱ」は現場情報または既得情報を根拠にし、推論過程を経て判断する場合に用いられる。また、「^{koss}·^c·ⁱ」は根拠獲得の時間性や推量方式と関係なく、両者に比べて事態成立に関する確信度が落ちる傾向がある。

(30a) かわいそうだけれど 逃がしてやったら、またわるさをするだろう。(日本の神話)

(30b) 불쌍하기는 하지만, 놓아주면, 또 나쁜 짓을 할 거야/하겠어/?하겠지.

(bulssanghaginunhazimannoajumyeon, ttonappunjissul halkeoya/kessta/kessji.)

逃がしてやったら、またわるさをするだろうという話は話者が直接現場で聞いた近い過去の経験や情報なので、これに基づいた推論性推量で「^u·^{koss}·ⁱ」が適切であるが、過去の情報であっても、過去の経験現場に基づいて、直観的な推量をして「^{koss}·^c·ⁱ」を使用することが可能である。しかし、推量の確信度が落ちる、「^{koss}·^c·ⁱ」は不自然である。

(31a) (同窓会がすでに始まった。しかし、太郎はまだ来ていない。)

A: 多分、太郎は来ないようだな。

B: いや、出席するだろう。先週、必ず参加するって言ったんだよ。

(31b) A: 철수가 오지 않으려나 보다. (cheulsuga ocianeuryeonaboda.)

B: 아니야, 나올 거야/*나오겠다/?나오겠지. 지난주에 꼭 참가한다고 했어.

(aniya, naolkeoya/naokess/naokessci. jinanjue kok chamgahandagoheesseo.)

例(31)では「だろう」が韓国語の「^u·^{koss}·ⁱ」にだけ対応する。その理由は推量根拠になる情報が過去のもので、その以前情報を根拠にし、推論過程を経る判断のためである。

(32a) (公園に散歩しに出たが、空が黒くなってきたのを目にしながらか)

もうすぐ、雨が降るだろう。早くうちに帰ろう。

(32b) 곧 비가 오겠다/*올 것이다/*오겠지 (got biga okessta/oulkeoita/okessci.)

ところが、上の例(32b)から確認できるように、「だろう」が「-겠-」にだけ対応する場合である。すなわち、現在の情報に基づいて、話し手が直観的に推量判断する場合である。以上のように、「だろう」及び対応する韓国語形式の間には純粹推量という共通点も見られるが、相違点も少なくない。まず、「だろう」という一つの形式に韓国語形式は三つ対応され、この三つの形式の中でも、「-겠-」「-을 ^u겠이-」は推量根拠の獲得時点と推量方式という語用論的原理によって、使い方が区分される。また、「だろう」に対応する韓国語形式は三つも存在するが、常に三つの形式が対応できるのではなく、状況によって、対応される形式が異なるという点を看過してはならない。しかし、多くの場合、一つのみ対応可能な場合が見られる点を看過してはならない。このような現象が起こるには理由がある。これは関連する韓国語形式が推量根拠の特性や推量方式によって、選別的に実現されるのに対し、日本語はこのような区分なしに、「だろう」一つで実現される言語上の差異のためである。根本的には言語圏による対象の認識方法の違いであると考えられる。従って、「だろう」を韓国語に対応させる際には「だろう」推量の根拠及び推量方法を調べる必要があるが、このためには「だろう」が用いられた文脈や状況などの語用論的考慮が前提されなければならない。次節では両言語に見られる用法上の違いを考えてみたい。

4.3 「だろう」と韓国語推量形式の推量用法上の違い

前節では推量形式「だろう」が韓国語の三つの推量形式に対応される特徴的な面を考察した。ところが、このような一対三の対応がいつも可能であるとは言えない。特に、「だろう」の推量用法は韓国語形式に比べて制約が多いが、このような点は既存の対照研究では指摘されてこなかった。言語間の対照研究をする場合、対応されない現象も綿密に分析する必要があり、既存研究ではこの部分をあまり関心対象においていなかった。

(33a) (事前情報や経験がまったくない初めてみた食べ物を見ながら)

*これ、おいしいだろう。

(33b) 이거 맛있겠다. (igeo, masisskessta.)

(33c) 이거 맛있을 거야. (igeo masissulkeoya.)

上記した例(33a)の場合、「だろう」の使用は不自然であるが、(33b)の韓国語の推量形式「-겠-」は問題なく許容可能である。その理由は「-겠-」推量が現場性に基づいた直観性推量からである。また、(33c)の「-을 ^u겠이-」は目の前にある食べ物に対する既得情報を持っている場合のみ可能であるが、本稿で挙げた例文からも確認できるように、既得情報を持っている場合であれば、「だろう」も使用可能になる。しかし、以下の例のような同一状況や場面において、「だろう」と対応する韓国語形式の間に許容度の差が出る。

(34a) *道路が濡れている。昨夜 雨が降ったらう。(日本語記述文法研究会 2003)

(34b) 도로가 젖어있다. 어젯밤에 비가 왔겠다/왔을 거야/ 왔겠지.

(doroga jeoseoissta. eojesbame biga wasskessta/wassulkeoya/wasskessci.)

上の例(34a-b)のように、同一状況で「だろう」の使用は不自然であるのに対し、韓国語は問題なく用いられる。もう一つ、例文を加えて見る。

(35a) *呼んでも返事がない。よく分からないが、寝てるだろう。(泉原 2007 : 950)

(35b) 불러도 대답이 없다. 잘 모르지만 자고 ?있겠다/자고 있을 거야/자고 있겠지.

(buleododaedapieopptjalmorukesscimanjagoissgessta/jagoissulkeoya/isskessci.)

上の例(33)~(35)では両言語の推量形式の用法に違いが見られる。既存の対照研究ではこのような語用論的状况による両者の許容度の違いについては考慮して来なかった問題である。例えば、上の例(33a)で「だろう」が不自然である理由はまったく既得情報のない目前に観察した食べ物の外見だけで「味の判断」という主観的感覚を推量する場合は根拠として不適切からである。それに対し、対応する韓国語形式は問題なく自然に用いられる。この現象が意味するのは「だろう」が韓国語形式に比べてもっと明確で確実な根拠を要求すると理解される。このような考えは例文(34a)でも同様に説明可能ではないかと思われる。すなわち、道路が濡れているという現象だけでは、「だろう」推量成立の根拠として足りないから、「だろう」は用いられないと判断している。一方、韓国語は対応する三つの形式すべて許容可能である。また、例文(35a)においても、「だろう」推量は不自然であるに対し、韓国語の場合は「^{koss}ㄷ겠다」だけが少し不自然に感じられるが、対応するその他の二つの形式は問題なく用いられる。現段階において、本稿は「だろう」と対応する韓国語形式の間に見える弁別性として考えられる点は推量形式「だろう」が韓国語対応形式よりもっと確実な根拠を要求するという点である。このような現象を別の観点から考えると、「だろう」推量の範囲や領域が対応する韓国語形式より狭いということを意味する。言い換えれば、韓国語形式が推量できる範囲が相対的に広いことを意味する。

5. まとめと今後の課題

本稿では「だろう」の推量用法の究明及びこれに対応する韓国語推量形式との対照に注目してみた。本稿で述べた内容をまとめると以下のようである。

① 「だろう」の推量用法は大きく二つの場合に分けられる。

- a. 現実世界に基づいた推量：既存研究で主張した様々な類型の推量根拠と関係なく、根拠が明確な場合には自然に用いられる。
- b. 想像世界に基づいた推量：表面的に見られる実在的根拠がなくても、使用可能だが、話し手の心中には漠然であっても、何か根拠になるものがある場合に用いられる。

② 既存研究とは違って、「だろう」に対応する韓国語形式「^{koss}ㄷ겠다」 「^{ul}을 ^{koss}ㄷ것어-」 「^{koss}ㄷ겠지-」の

三つである点、そして、これらの形式は推量根拠の獲得時点と推量方式という語用論的原理によって選別的に用いられるという点を明確にした。これによって、「だろう」と対応する韓国語形式の用法を明確にするためには語用論的アプローチでないと、解決できないという点を言及した。ところが、「だろう」の推量用法を規定できる明確な語用論的条件を提示することはできなかつた。

③本稿では「だろう」と対応する韓国語形式に見られる用法上の違いにも注目した。

- a. 純粹推量形式で、「だろう」と類似な振る舞いをする形式が三つ存在する。
- b. 同一場面で「だろう」が成立できない場合、韓国語形式は許容可能な場合が多い。
- c. 韓国語形式に比べて、日本語の「だろう」は根拠の客観性や確実性が要求される。

本稿は「だろう」の推量用法に究明しようと試みたが、現段階においての暫定的な見解を提示して段階に留まったため、今後、解決すべき問題も多く残っている。すなわち、本稿では話し手が現実世界に実在的に出現した根拠に基づいて判断を行う場合、「だろう」推量の成立条件として述べた S1(根拠節)と S2(推量節)間に必然性または根拠の客観性が要求されると捉えたが、必然性や客観性というのも度合いの問題であるため、明確にその境界を区分することは容易ではない。この問題をどう捉えるべきなのかについては今後更なる考察が必要である。また、今回は考察対象を「だろう」の推量用法と対応する韓国語形式の対照分析に絞って論議を進めたが、今後は「だろう」だけではなく、「だろう」とその他の推量形式の用法と制約における連続性や弁別性の問題も視野に入れて考察する必要がある。このような作業を通して推量形式の意味用法の全体像が見えてくると思われる。すべて今後の課題になる。

【参考文献】

- 倉持安男(1980)『教師用日本語ハンドブック④』国際交流基金
- 泉原省二(2007)『日本語類義表現一使い分け辞典』研究社
- 澤田治美(2007)「語用論の可能性ーモダリティの視点から」(『言語』36)
- 寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- 中島孝幸(1990)「不確かな判断ーラシイとヨウダ」(『日本語文学』1号 三重大学)
- 仁田義雄(1991)『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- 仁田義雄(2000)「認識のモダリティとその周辺」森山卓郎・仁田義雄・工藤浩『日本語の文法3 モダリティ』, pp.81-159, 岩波書店
- 益岡隆志(1991)『モダリティの文法』くろしお出版
- 三宅知宏(1995)「推量について」(『国語学』183)
- 三宅知宏(2006)「実証的判断が表される諸形式ーヨウダ・ラシイをめぐって」益岡隆志・野田尚史・森山卓郎編『日本語文法の新地平2 ; 文論編』くろしお出版
- 宮崎和人(1993)「～ダロウ」の談話機能について」(『国語学』175)
- 宮崎和人外(2002)『モダリティ』くろしお出版
- 日本語記述文法研究会編(2003)『現代日本語文法4 第8部モダリティ』くろしお出版
- 金東郁(1999)「真偽判断モダリティの日韓対照研究」筑波大学文芸・言語研究科博士論文
- 金良宣(2002)「現代日本語における「らしい, ようだ, みたいだ, (し) そうだ, だろう」の純粋な推量表現の比較」『韓国日語日文学研究』44号
- 羅聖榮(1995)「日韓モダリティの対照研究」筑波大学文芸・言語研究科博士論文
- 尹相實(2003)「日韓両言語の推量表現の対照研究」『韓国日語日文学研究』46号
- 김규철(1988)「모습의 -겠-② 과 바탕의 -을것-」『관악어문연구』13
- 민현식(1999)『국어문법연구』역락
- 徐正洙(2006)『国語文法』한양대학교 출판원

【用例出典】

- 熱帯樹 (2002) 著: 三島由紀夫
- 日本のむかしばなし 著: 斎藤明美
- 日本の神話 著: 岡智之
- 真実(上、下) 著: 入間 真
- 泉原省二(2008) 日本語類義表現一使い分け辞典